

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530815

研究課題名(和文) 異文化をつないだ日・米の支援者たち 朝鮮人女子留学生への支援の形態に着目して

研究課題名(英文) Japanese and American supporters who connected intercultural situations - focusing on the supporting systems for Korean female students in the main island of Japan

研究代表者

太田 孝子(OHTA, Takako)

岐阜大学・留学生センター・教授

研究者番号：00293580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：柳原吉兵衛は奨学金の贈与など種々の援助を行い、関屋依子、栢富照子は、李方子が創設した「鴻嬉寮」(1940年設立)の寮母、顧問として茶道・短歌等を教授し、朝鮮人女子留学生に多くの影響を与えた。彼らの支援は、日本理解を願がったのものではあったが、「日本への同化」を意図した支援であったと評せられる一面を伴った。

他方、東京YWCA「朝鮮人女子学生寄宿舍」(1940年設立)開設当時の総幹事加藤タカは、アメリカ滞在をはじめとする豊富な国際経験を有していたにもかかわらず、戦況悪化とともに戦時協力へと転じ、YWCAの性格を大きく変質させていく。両者とも同様の意識下での支援であったことが判明した。

研究成果の概要(英文)：K.Yanagihara gave scholarships, while Y.Sekiya and T.Masutomi taught teaceremony, calligraphy and Tanka and such for Korean female students in Kokiryoo Dormitory, which was established by the princess of Korean Dynasty. Despite their desire to gain a deeper understanding of Japan, their supporting systems were considered to have been "assimilated into Japanese society".

On the other hand, T. Kato, the general secretary of Tokyo YWCA, cooperated during the war in spite of she had many international experiences. The Tokyo YWCA dormitory for Korean female students ran under such situations, and I discovered that what both of these groups did during the war was the result of the same consciousness.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：異文化理解 留学生支援 内鮮融和

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者が所属する「高等女学校研究会」では、女子中等教育の実態把握を目的に、日本国内、南洋群島、関東州、満州、中国大陸、台湾、朝鮮の公・私立高等女学校の調査・研究を行い、28校の高女卒業生に対するアンケート調査(卒業生には総計1,397通送付、回答331通、元教師には計5通送付、回答2通)、高等女学校卒業生28名及び元教師5名に対するインタビュー調査、11校の学校史の翻訳を終えている。北朝鮮に在った高等女学校の調査は現在不可能であるため、大方の高等女学校及び高等女学校卒業生の動向は把握できたと言える。その成果は『高等女学校資料集成』(全17巻、大空社)の他、会員の論文・著書等として刊行している。次いで、高等女学校生徒の卒業後の進路に関し、特に「日本(内地)への留学生」に焦点を当て調査を実施した。内鮮融和政策と内地留学生数の関係、内地留学と抗日運動の関係にも着目しながら、朝鮮人女子内地留学生の実態を調査し、卒業後の歩みや社会参加の在り方も検討した。

(2) 上述のように、本研究は、これまで科研費を獲得して実施してきた「植民地下朝鮮の高等女学校の実証的研究」、「朝鮮からの女子内地留学生の研究」を発展させた内容であり、朝鮮人女子留学生に対する支援者グループ及びアメリカ留学から帰国した日本人女性の中、朝鮮人女子学生を支援したYWCAグループの二者の存在に気付いたことにより構想したテーマである。

津田梅子の要請に応じて設立された「モリス奨学金」は、「日本婦人米国奨学金(ジャパニーズ・スカラシップ)」とも呼ばれ、奨学金を受けた日本人女性は25名を超える。中でも、河合道(1877~1953)藤田たき(1896~1933)等の奨学金受給者の多くが、帰国後、東京YWCAに関与し、その人脈の中で、東京YWCAは「朝鮮女子留学生寄宿舎」を開設する。さらに、朝鮮と直接関わりを持ち、朝鮮人女子留学生を支援した柳原吉兵衛(1858~1945)や関屋貞三郎(1875~1950)・依子(1885~1979)・柘富安左衛門(1880~1934)・照子(1888~1972)も、キリスト教徒として、河合道等と交流を持ちながら支援を続けた。

朝鮮人女子留学生を支援した日本人グループ、朝鮮人女子留学生を支援したアメリカ留学経験者グループの相互関係を究明し、支援の内容及び実態を考察することが課題となり、本研究に着手した。

2. 研究の目的

(1) 朝鮮からの女子留学生を支援した柳原吉

兵衛、関屋貞三郎・依子、柘富安左衛門・照子に関する文献・資料調査を行い、支援の実態を把握する。

(2) 東京YWCAと朝鮮女子留学生寄宿舎に関する文献・資料調査を行い、どのような経緯で寄宿舎が設立し運営されたのか、支援の実態はどのようなものだったのを究明する。

(3) 朝鮮人女子留学生を支援した日本人グループ、朝鮮人女子留学生を支援したアメリカ留学経験者グループの相互関係を究明し、支援の諸相を考察する。現在も留学生に対する多様な支援が続けられているが、留学生にとって望ましい支援の在り方を探ることが最終的な目的である。

3. 研究の方法

(1) 資料・文献の収集、内容の分析による検証

柳原吉兵衛(大和川染工所創業、李王家御慶事記念会会長、内鮮協和会結成)については、桃山学院資料室に保存されている「柳原吉兵衛資料」を精査し、女子内地留学生に関する文献・資料を収集、検討する。同資料室所蔵の「大和川染工所創設者柳原吉兵衛略伝」(『大和川染工所七十年小史』、1966)により柳原の思想・理念等も把握する。

関屋貞三郎(朝鮮総督府内務部学務部長)については、国会図書館に「関屋貞三郎関係文書」として所蔵されている書簡、日記、書類2,225点の中から、朝鮮人女子学生への支援に関連する文書を探し出し、実態を把握する。次男の関屋友彦著「使命感に燃えた三人男」(紀尾井出版、2001)、『私の家族の選んだ道』(紀尾井出版、2002)及び両書の参考文献一覧も参考に、資料を収集する。

関屋依子・柘富照子については、すでに「鴻嬉寮」入寮者へのインタビューにより証言を得ているが、本研究との関連では文献が少ないため、資料収集に努める。岡本嗣朗『陛下をお救いなさいまし 河合道とボナー・フェラーズ』(集英社、2002)にも関屋依子に関する言及があるため、参考にする。柘富照子に関しては、黒瀬悦成『知られざる梯』(朝日ソノラマ、1996)、『柘富照子』(私家本)等を参考にする。

東京YWCAが開設した「朝鮮女子留学生寄宿舎」に関する調査では、渡辺松子『エマ・カフマン』(東京YWCA、1963)、『水を風を光を 日本YWCA80年1905-0985』(日本キリスト教女子青年会、1987)日本YWCAの機関誌『女子青年界』『東京YWCAなどの文献があり、関連部分を調査することにより実態把握に努める。

4. 研究成果

(1)日本人支援者が朝鮮からの女子留生に対して行った支援に焦点を当て、文献・資料調査を行った結果得た成果は、以下のとおりである。

柳原吉兵衛が会長を務める「李王家御慶事記念会」が、趣意書に従って実施した朝鮮の女子高等普通学校や高等女学校の優等卒業生への表彰は、1920年～42年までに1,048人に達する。さらに、その内の80余人に対しては奈良女子高等師範学校等への入学を支援し奨学金を提供した他、日常生活に関する種々の援助も行った。中でも特異な支援は、1)説話会や寄稿文等による内鮮融和精神の注入、2)朝鮮総督、県知事、皇室や朝鮮王室などの社会的名望家との接触による留学生への精神指導、等があげられる。留学生を「日本文化の下に教養」することを目指したと言える。

また、柳原は朝鮮で教員となった人々を対象に、計3回に及ぶ「朝鮮女子教員内地視察」を実施している。内地経験のない朝鮮女子教員(主に普通学校の教員)に対して、日本の小学校等への内地視察の機会を与えた支援であり、『女教員内地学事視察録』(1927年)、『朝鮮女子教員内地視察記』(1929年、30年)が残されている。1カ月以上にわたり日本各地の小学校、高等女学校、東京女子高等師範学校等を視察したが、その行程、視察内容、感想等が記録されている。また、視察団の団長(複数名)は帰国後教員となった内地留学経験者が務めており、帰国した後も柳原と交流が続いていたことが判明した。視察も、柳原の内地理解を深めたいとの思いが表れた支援だったと言える。

国会図書館憲政資料室に所蔵されている「関屋貞三郎関係文書」2,225点には、朝鮮に係する文書は極めて少なく、中でも朝鮮から内地へ留学した女子学生の支援に関する言及は皆無であった。関屋は併合直後の1910年10月に学務局長に就任し、主導的立場で「朝鮮教育令」や各学校規則を制定し、「私立学校規則」の改正にも関与した。規則制定に際しては、1)歴史、風俗習慣、特に経済力を考慮しなくては教育効果は挙がらない、2)教育勅語の遵守といっても内地と同様にはいかず直ぐに義務制度を施行することはできないので、「時勢」と「民度」の発達に応じて段階的に実行していくべきである、3)国語は国民精神の宿るところであり教育の基礎をなすものである等々、朝鮮の現状を考慮すべきとする自身の教育観を反映させた。「時勢」「民度」の語は「もう一工夫したい」旨、総督寺内に進言したが、却下されたようである。関屋が規則制定に及ぼした具体的影響を把握することができた。

一方、関屋は朝鮮人に対しても関心を持ち続けたため、3・1運動勃発の際も関屋を味方だと考える朝鮮の友人たちが多くの情報を寄せて

くれたため、騒動を鎮圧することができたと言われている。他方、内地で勉強する朝鮮人学生に対する支援を行い、学務局の小使だった少年を東京の自宅に住ませ、大学入学から就職まで面倒を見ている。キリスト教を通じても朝鮮人との交流を持ったが、この点に関してはクリスチャンだった妻衣子の影響が大きい。衣子は教会では朝鮮人と礼拝を共にし、自宅を開放して家庭集会を開き、朝鮮の人々の相談に乗り苦難を分かち合っていたと言われる。内鮮融和に心を砕いていた寺内総督も、衣子の姿勢を評価し励ましの言葉をかけている。依子は女子留学生のための寄宿舎「鴻喜寮」(1940年李王妃方子によって渋谷区の李王職長官邸に創設)の寮母として寮生を指導した他、茶道、習字等日本文化に関するプログラムを種々用意し、寮生のその後の歩みにも影響を与えた。

枳富安左衛門は朝鮮で果樹園を経営、私塾「興徳学堂」、私学「吾山高等学堂」を創設して朝鮮人学生を教育し、多くの朝鮮人を日本に留学させ、学びの機会を与えた。また、妻照子は、「鴻喜寮」の顧問に就任、短歌を教え、孫戸妍(多くの歌集を出版し、1998年1月には宮中歌会始に招かれた)等の歌人を育て、内鮮一体政策の具に終わらない支援を行った。孫戸妍等、寮生との交流は戦後も続いている。枳富安左衛門は幾多の功績により、死後60余年を経た1995年に韓国政府から「国民勲章」を授与されている。

(2)アメリカ留学から帰国した日本人女性たちは日本YWCA、東京YWCAを設立し、朝鮮人女子留学生に対しても多くの支援を行った。朝鮮から内地に留学した女子学生のために創設した東京YWCA「朝鮮女子学生寄宿舎」に関する文献・資料調査から得た成果は、以下のとおりである。

1939年3月、基督教女子青年会日本同盟朝鮮联合会から在東京朝鮮人女学生のための寄宿舎設立の要望が寄せられたが、寄宿舎難、募集時期等の問題により、1年間の準備期間を設けた上で開設を目指すことに決定した。1940年3月、朝鮮女子学生寄宿舎開始を東京YWCA機関誌『女子青年界』4月号で発表、場所は牛込区納戸町とした。寄宿舎は寮生36名、費用は25円(舎費7円、食費15円、雑費3円)で出発し、舎母には伝道のために内地に来ていた金徳栄が、舎監には青山学院神学部出身の李温順が就任した。11月より、河合時尾が朝鮮女子学生寄宿舎監督及び職員アパート監督を兼任した。寮の方針は「基督教の精神により規律正しい共同生活を営み、社会人としての良き人格教

育を施すこと」であった。36人が収容限度だったため、やむなく入寮を断る状態が続いた。寮生活の様子はYWCAの機関誌等にもほとんど残されていないため、詳細は不明であるが、『女子青年界』（1940年7月1日号）には、開寮時と寮生の集いの様子を写した2枚の写真と「朝鮮女子学生寄宿舎の朝夕」と題する記事が載っており、文章にはようやく探し求めていた「希望と喜びに満ちた場所」にたどり着いた安堵が綴られている。

1945年4月の空襲で、寄宿舎焼失。当時の舎監は朴貞子（他家族4人も同居）であり、寮生は32人であった。寮生のうち15人は直後に朝鮮に帰国したが、17人は近くにあった朝鮮の男子寮を兼ねた崇徳教会で避難生活を送り当座をしのいだ。朴に対するインタビューが機関誌『東京YWCA』1995年9月号に載っている。

(3) 朝鮮人女子留学生を支援した日本人たち、朝鮮人女子留学生を支援したアメリカ留学経験者たちの支援の形態を比較・考察した結果は以下のとおりである。

朝鮮人女子留学生に対する支援活動を展開した柳原を、朴宣美は「帝国のさまざまな価値を植民地人に積極的・組織的に伝播し、植え付けようとするコロニアル・ミッションリーのような存在」だったと評し、樋口雄一はその活動を「朝鮮人としての精神的生命を奪い去る非道の行為」だったと断じている。しかし、内地の諸学校を卒業後、柳原に送付された元卒業生の書簡を読む限り、上述のような評価で柳原の支援活動を片付けていいのかという疑問が残る。また、樋口に対しては、柳原家から反論を記した意見書が送られている。

李王家が創設した「鴻嬉寮」の寮母、顧問として日本文化を教授した関屋、枡富の行為も「同化」の側面を有している。しかし、元留学生との戦後まで続いた交流を見る限り、その支援は「同化」を超えたものであり、筆者も元寮生から「鴻嬉寮の生活は教養と精神教育の面で生涯の糧になった」等の証言を得ている。女性の高等教育の振興に力を注いだ柳原、関屋、枡富等の支援の全容を解明し、これまでの評価を再検討する必要を感じている。

朝鮮から内地に留学した女子学生のために創設された東京YWCA「朝鮮女子学生寄宿舎」が開寮されていた当時のYWCA総幹事加藤タカに関する文献・資料等により、YWCAが戦時下どのような認識を持ちながら、どのような活動をしていたのかという観点から分析し、以下を把握した。加藤タカが『女子青年界』に寄せた文章は全部で42編あるが、1) アメリカ滞在中の記事にはアメリカ人の気質、小学校の雰囲気、女性の地位、家族愛の深さ、外国人に対する姿勢などへの感銘が記されており、2年間に及ぶアメリカ滞在から多くの影響を受け、学ぼうと

する姿勢が強いことが分かった。2) 反面、1937年5月から6ヵ月間に及ぶ世界YWCAでの働きを終えて帰国する途中香港に立ち寄った加藤タカは、現地のYWCAメンバーから日本軍の行動を激しく責められ、平和のための活動に携わる決意を固めたものの、帰国後間もなく日本の行動を是認、戦時協力を志向するようになり、報国団の練成会、有職婦人の研修会、勤労奉仕等の活動を開始する。「朝鮮女子学生寄宿舎」の運営に直接影響を及ぼしたわけではないが、同寄宿舎はYWCAの戦争協力体制の中で開寮されていたことが分かった。戦時下だけを注視する時、朝鮮からの女子内地留学生を支援した柳原吉兵衛をはじめとする支援者たちと変わらない意識下での支援であり、平時における支援との隔たりが把握できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

1. 太田孝子「植民地下朝鮮からの女子内地留学生()」岐阜大学留学生センター『留学生センター紀要 2012』、査読有、p3~18、2014年
2. 太田孝子「植民地下朝鮮の高等女学校」『如水会々報』、査読無、p16~19、2013年2月号、2013年
3. 太田孝子「植民地下朝鮮からの女子内地留学生()」岐阜大学留学生センター『留学生センター紀要 2011』、査読有、p3~18、2012年
4. 太田孝子「植民地下朝鮮からの女子内地留学生()」岐阜大学留学生センター『留学生センター紀要 2010』、査読有、p19~35、2011年

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 1 件)

1. 柳宗鎬著、白燦訳、太田孝子日本語校閲「かの冬、そして秋 僕の朝鮮戦争」、春風社、2010年、全407ページ

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

1.「若き日の内地留学 新女性たちの知の獲得」
講演：太田孝子、岐阜大学留学生センターフォー
ラム「日韓教育交流の軌跡」、2014年2月11
日、於：岐阜大学サテライトキャンパス
2.「植民地下朝鮮の高等女学校」講演：太田孝
子、一橋大学開放講座、2012年11月15日、於：
如水会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 孝子 (OHTA TAKAKO)
岐阜大学・留学生センター・教授
研究者番号：00293580

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：